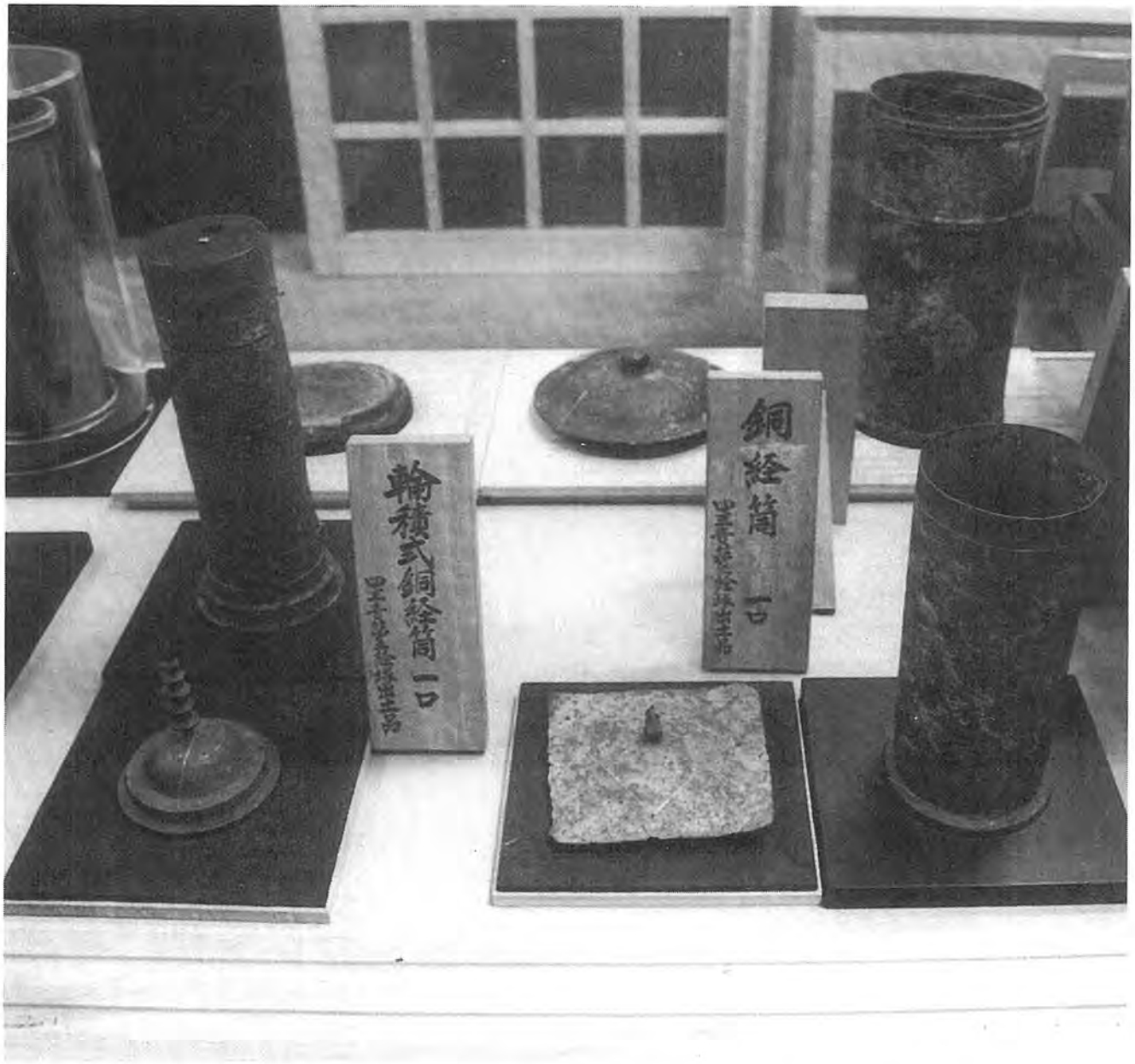
市政だより
太宰府
NO. 469
平成3 4.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財 ⑦1

筑前国四王寺趾経塚群出土品（重要文化財）

平安後期　宇美八幡宮所蔵

昭和二年に四王寺山頂の毘沙門堂近くで発見されました。

経塚とは仏教経典を書写供養した後、土中に埋めたものです。平安時代に入るとお釈迦様が亡くなって二千年を過ぎると釈迦の教えが行われない末法の世になるという思想が流行し、経典を保存するため経塚が盛んに作られます。

この毘沙門堂の経塚も、平安後期の十二世紀初めごろから八カ所の経塚が造営されています。

代表例をいくつかあげてみますと、木製の内筒を持つ鋳銅製の経筒があります。それは滑石製の如来立像に抱かれたような形で埋められていました。

また、この地方独特の筒身が四段積上式になった鋳銅製の経筒も二本出土しています。

須恵器の甕を外容器とした経筒には、元永二年（一一一九）、勧進僧良實などの銘文があり、中にお経の残欠十巻分が残っていました。

他に中国越州窯系の陶製経筒、鏡、青白磁の小壺、経軸などが見つかり、種類・量・内容とも、太宰府地方の経塚遺物を代表するものとして価値の高いものです。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線514

市政だより
太宰府
NO. 471
平成3 5.1
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ⑫

碾磑

直径百三センチ　上石厚さ二十一センチ
下石厚さ二十八センチ　観世音寺蔵

碾磑（てんがい）とは水車を動力にした脱穀用のつき臼（うす）と、製粉用のすり臼の総称です。中国の唐時代、小麦栽培の普及や粉食の流行により碾磑も広く使われるようになりました。

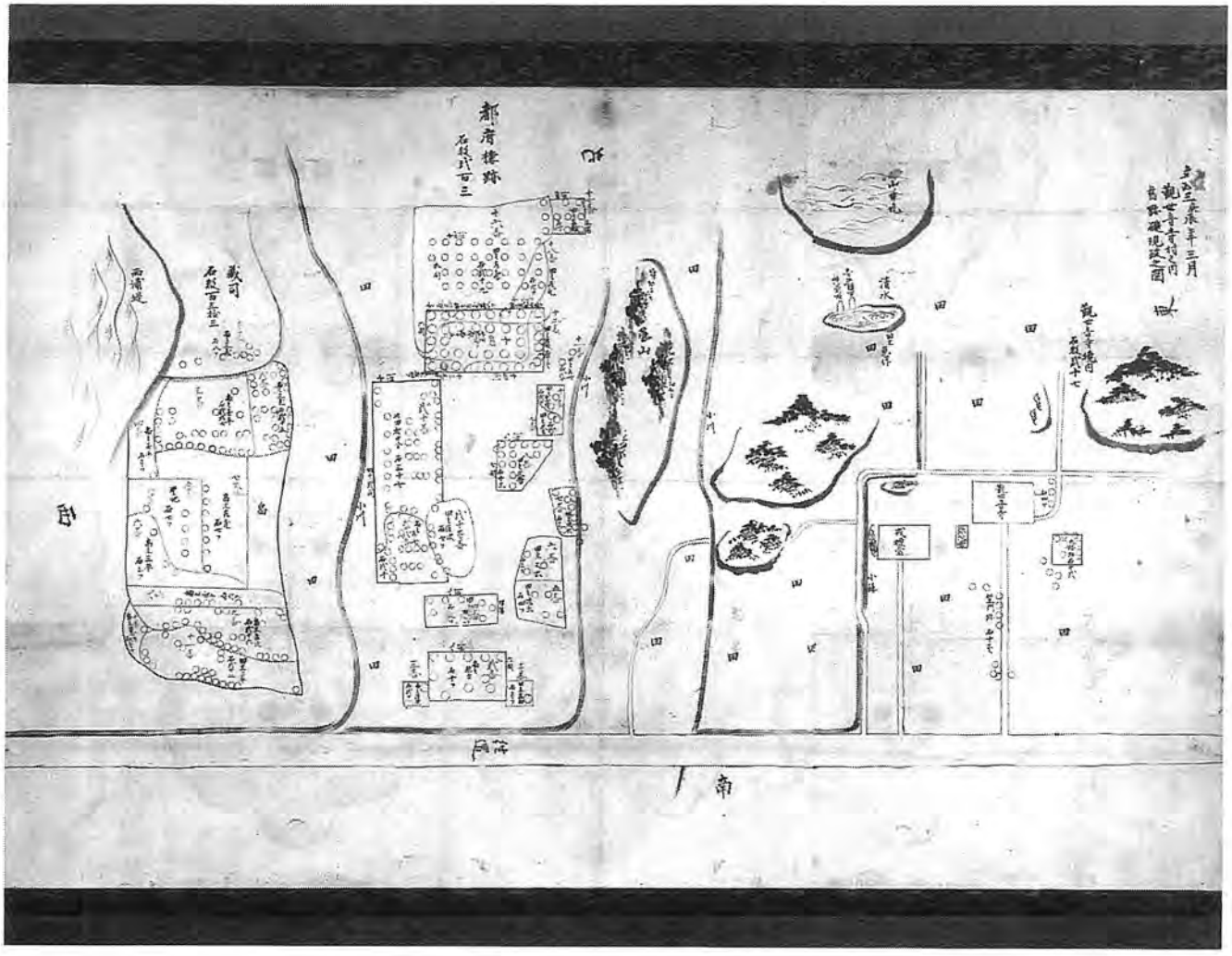
日本では推古天皇の十八年（六一〇）高麗王が献じた僧曇徴（どんちょう）が初めて碾磑を造ったとあり、観世音寺のこの碾磑がそれであるという伝えもありますが、定かではありません。江戸時代の地誌類には、「観世音寺造営の時に朱をすった臼だ」といういい伝えや、「鬼の茶臼」と俗称されていたことなどが記録されるのみです。

この碾磑についてはまだ詳しい調査が行われていないので、はっきりしたことはわかりませんが、臼に刻まれた目の状態から、小麦などの穀物を粉にひくよりも、鉱物質のものを粉砕する方に向いているといわれています。お寺を建てる時、塗料として使う「朱をすった」といういい伝えは、全く架空の話でもないかもしれませんね。

この碾磑は、講堂の前、向かって左隅の石玉垣の中に据っています。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 473
平成3 6.1
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



写真提供：九州歴史資料館

太宰府の文化財 ⑬

文政三年観世音寺村之内旧跡礎現改之図

江戸時代　福岡市博物館所蔵

上図は、江戸時代後期の文政三年（一八二〇）三月に描かれた、当時の観世音寺村内に残る礎石の調査図です。ご覧のように観世音寺境内、都府楼跡、蔵司と三グループに分け、礎石の総数、位置、地主名及び地主ごとの礎石の数、境界線などが詳細に記されています。

この図は、昭和四十三年から始まった大宰府の発掘に大きく役立ちました。

例えば都府楼跡を例にとると、二十年前の調査開始時には七十三個しか残っていなかった礎石が、文政三年のこの図では二百一個（総数二百三個と記されているが）も描かれています。しかも、その位置はかなり正確で、今では失われてしまった多くの礎石を復原するのに大変参考になりました。

さて、この図の作成の経緯は明らかではありませんが、黒田藩では文政より約四十年前の天明年間に礎石の除去を禁じています。そして寛政五年（一七九三）には、藩主黒田斉隆の命で礎石配置図が作られるなど、一連の遺跡保護策が行われますが、その延長上にこの文政図もあると思われます。

しかし、せっかく保存された遺跡も幕末から明治にかけて人々に忘れられ、礎石はその多くが失われることを考えると、この古図は今日の文化財保護策にも大きな示唆を与えるもののように感じます。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 475
平成3 7.1
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財⑭

水瓶山雨乞い祭具

滑石製外容器 二個
陶製経筒 四筒

平安時代　太宰府天満宮蔵

科学が発達した現代でも、自然現象は人間の力の及ばないところです。雨を降らすこともその一つで、昔も今も〝ヒデリノトキハ、ナミダヲナガシ〟天に祈るしかありません。上記の写真は、私たちの先祖のそんな思いが一杯詰まった雨乞いの祭具です。

この四王寺中腹の水瓶山の雨乞い祭具としては、六個の水瓶（みずめ）と呼ばれる容器と二個の壺（つぼ）が伝わっていました。これらはもともと雨乞い用に作られたものではなく、経塚の経筒とその外容器でしたが、いつのころからか掘り出されて、雨乞い用の聖水入れに使われるようになったと思われます。

右の写真は水瓶の一つで、中国製の陶器です。水瓶は六個のうち五個がこのような中国製の陶器で、残り一個が青銅製でした。が、残念ながら現在は、陶製と青銅製の各一個が盗まれ、表題のように四個の陶製経筒しか残っていません。

さて、左下の写真は滑石製外容器の壺の一つで、上はその蓋（ふた）の写真です。ご覧のように、蓋には何かたくさんの文字が刻まれています。それはどうもこの壺が開かれた時、つまり雨乞いが行われた日付と、それに関係した僧侶の名ではないかと推定されています。

大自然の脅威の前には、ただ神に祈るしかなかった先祖たちの生きざまが生々しく伝わってきます。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 477
平成3 8.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財⑮

水瓶山法華曼荼羅板碑

南北朝時代　所在地 水瓶山山頂

前回取り上げました水瓶山の雨乞い祭具は、もともと経筒でしたが、それに関係するものとして、この板碑（写真右）があります。

板碑とは、本来供養のために建立した塔婆の一種で、石を板状に薄く造っているので、板碑といいます。

一般的な形としては、頂を三角にとがらせ、その下に二段の切り込みを入れます。そして、身の部分に供養する仏の像や、仏を表す梵字を刻み、その下に造った年月日や祈願文、祈願主の名などを彫り付けた形式が多いようです。

この水瓶山の板碑も頭が三角に加工され、その下に十四個の梵字と年号が刻まれています。

これは法華曼荼羅を表しており、水瓶山に埋められた経筒の中の法華経を供養するため、正平八年（一三五三）に造られたものと考えられています。

ところで、正平とは南北朝時代、南朝・宮方が使った年号で、南朝方、北朝方と入り乱れていた九州において、そのころの太宰府が、どちらの勢力に強く支配されていたかを示すものとして、興味深いものです。

ただ、この板碑は近年、風化による摩滅がひどいので、ある篤志家によってお堂の中に納められ、見ることができなくなりました。

（写真は昭和五十年代末の撮影）

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 479
平成3 9.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財⑯

神幸式絵巻

江戸時代　太宰府天満宮蔵

太宰府天満宮に今も続く神幸式（九月二十二・二十三日）は、平安時代の康和三年（一一〇一）に大宰権帥大江匡房によって始められました。その神幸式について江戸時代の様子を伝える絵巻が二巻、天満宮に伝わっています。

一は嘉永五年（一八五二）製―上掲写真―他の一は元治元年（一八六四）に描かれたもので、作者は同じ平戸樹光寺の円心です。

ところで、神幸式は、元治本の奥書によると、安政五年（一八五八）に、それまで行われていた祭の中で、行列の服装など、ふさわしくないものを改めたということです。そうすると、嘉永本は安政の改正前、元治本は改正後の神幸式の様子を伝えているということになります。

嘉永本を見ると、行列の中には、女・子供そしてお相撲さんの姿もあり、また、近隣の郡名を書き込んだ高張提灯を掲げる人々など、周辺の風景描写とも相まっていきいきと描かれ、そのころの神幸式はいろいろな階層の人が参加していたことが窺えます。

元治本は同じ作者ながら、その描写は平面的で、彩色も、青や朱、緑など色鮮やかな嘉永本に比べると、淡彩で地味な印象です。安政に実施された祭礼の改革は、格式を高めた反面庶民のエネルギーを奪ってしまったのかもしれません。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 481
平成3 10.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財㊼

原山無量寺古図

江戸時代　宮小路賀宏氏蔵

四王寺山の東麓、宇浦ノ城や原と呼ばれる地域には、昔、原山無量寺というお寺が建っていました。しかし、戦国時代、岩屋城の戦いで全て焼けてしまい、再興されなかったため、現在ではお寺を偲ばせるものは何もありません。

この絵図は、そんな無量寺のありし日の様子を描いたものとして貴重です。

原山無量寺は、通称原八坊と呼ばれ、寺伝によると、平安時代、天台宗の智証大師円珍の八人の弟子たちが、それぞれ坊を開いたのが始まりといわれています。八坊は華台坊、六度寺、安祥寺、十境坊、真寂坊、宝寿坊、寂門坊、明星坊で、絵図を見ると、本堂や中堂、宝塔院などの諸堂を中心に八つの坊が山肌いっぱいに建ち並んでいます。

原八坊は菅原道真の葬儀にあずかったとか、太平記で有名な足利尊氏が九州に落ちて来た時、この原山の一坊に入り、一カ月後、東上して室町幕府を開く契機になるなどしています。また、時宗を開いた一遍上人も、十三歳から十二年間原山の聖達のもとで修行をしています。絵図から想像される原山の大きさは、このことからも裏付けられます。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 483
平成3 11.1

題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ⑱

竈門山寺跡

奈良時代　竈門神社境内

竈門神社の参道の途中に、草原の中に大きな石が整然と並んでいる所があります。これは建物の礎石で、以前行った調査で奈良時代の瓦が見つかったことから、伝教大師最澄ゆかりの竈門山寺の一部ではないかといわれています。ただし、現在並んでいる礎石は、創建時の礎石を使って、平安時代の後期に再建された建物のものだそうです。

さて、最澄ゆかりの竈門山寺とは、延暦二十二年（八〇三）十月付の記録があります。

最澄は大宰府竈門山寺において中国へ渡る遣唐使船四船の航海安全を祈って、薬師仏四体を造った、ということです。

この記事により、竈門山（宝満山）麓に奈良時代から寺院があったことが推測され、それが前述の奈良時代の瓦の発見によって裏付けられたとされています。

その後、竈門山寺という名は使われませんが、大山寺、有智山寺、内山寺という名で、宝満山麓を拠点に大きな力を有する寺になります。殊に平安時代後期から鎌倉時代にかけて、中央との往来も多く、また、大宰府の役人や他の寺社と勢力を争うなど、その繁栄ぶりが窺われます。

しかしその有智山寺も、南北朝、戦国の戦乱を受けて衰退し、今では林や草原、田圃の中にわずかにその名残をとどめているだけです。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 485
平成3 12.1
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです

太宰府の文化財 ⑲

扁額『進德館』 木製

縦五十九センチ 横百八十七センチ
江戸時代末期 太宰府市所蔵

この額は、昭和六十一年に市民図書館館長室に移されるまでは、太宰府小学校に置かれていました。

なぜ太宰府小学校に伝わっていたか、その理由ははっきりしませんが、額に書かれた文字からわかることは、大変興味深いものです。

まず、「大学頭（だいがくのかみ） 林韓（あきら）」とはどんな人でしょう。

大学頭とは、江戸幕府の学問所である昌平坂学問所の長官のことで、林家が代々その職に任じられました。ちなみに良く知られた湯島聖堂は、その側にある、儒学の祖孔子を祀（まつ）ったお堂のことです。

林韓は、その号を復斎といい、第十一代の大学頭となった人で、幕末の寛政（かんせい）十二年（一八〇〇）に生まれ、安政（あんせい）六年（一八五九）六十歳で亡くなっています。

韓が大学頭となった頃は、嘉永（かえい）六年（一八五三）にペリーが浦賀に来航したり、ロシア船なども来るなど外交問題が頻発した時代で、韓も幕府の命により外交関係の記事を集めた『通航一覧』を編集しています。そして安政元年にはアメリカの使節ペリーの応接掛となり、日米和親条約の締結に従事しました。そうすると、この額はその翌年に書かれたことになります。

さて「進德館」という名は、江戸時代の藩校の名としていくつか使われています。殊（こと）に、信州高遠藩の藩校進德館は同じ韓の命名です。

以上のことを考えると、太宰府に伝わる「進德館」も何か学問所関係のものではなかったかと想像されます。

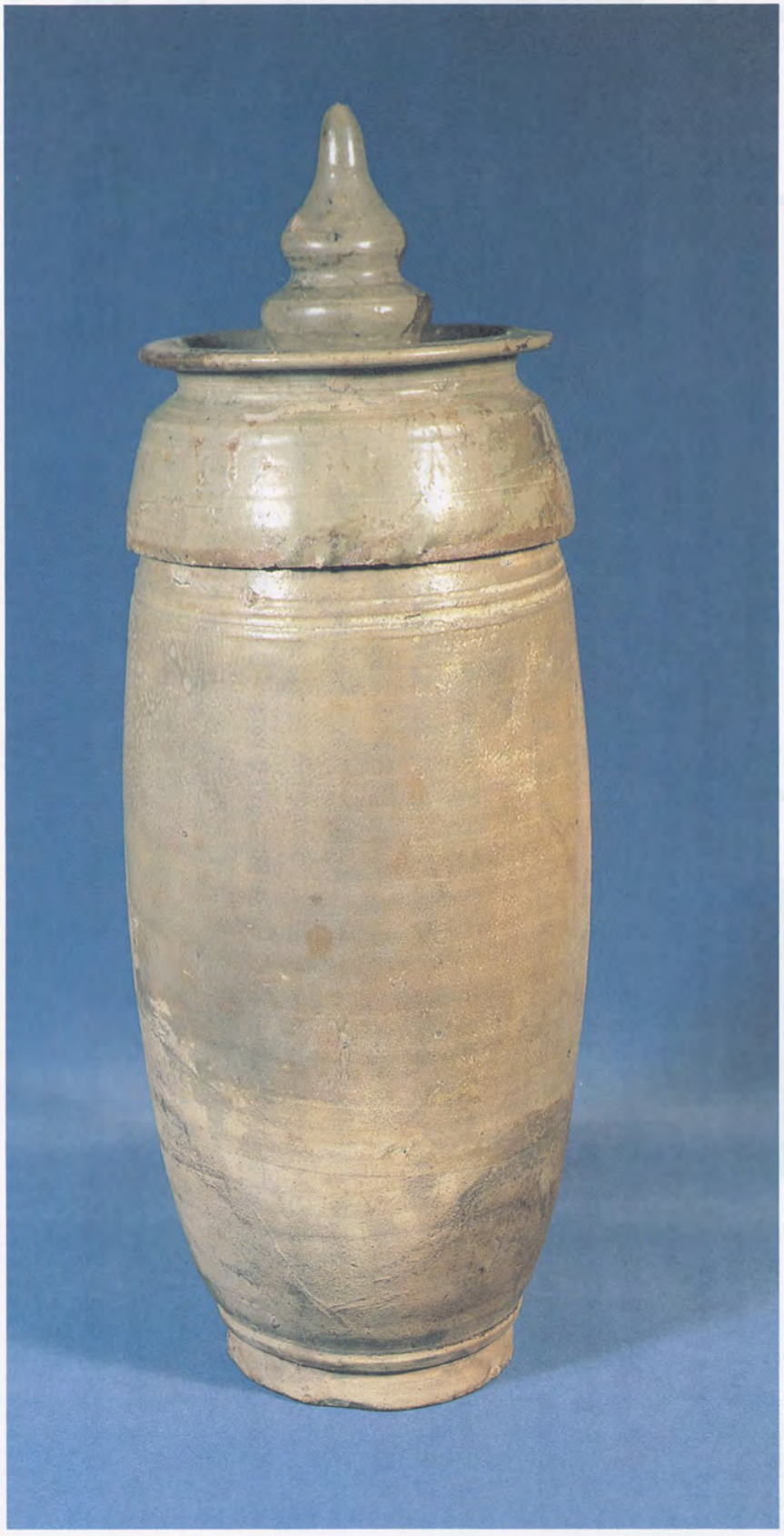
そう考えると、ここに興味深い資料が残っています。安政二年の十年前くらいから、太宰府天満宮において学校を建立しようという動きがあり、藩に許可を願い出ています。建てる場所も決めていたようですので、かなり具体的な計画だったようです。

そこで推定されるのは、この「進德館」という扁額はその学校に掲げるために、時の大学頭林韓に頼んで書いてもらったのではないかというものです。それが幕末の緊迫した世情の中で、実現されず、扁額だけが後世に伝わったのではないか、想像の域を超えませんが、以上のような推定をしてみました。

今の太宰府小学校に移る前は、連歌屋にあった連歌屋坊に掲げてあったという話も参考になるのではないでしょうか。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513

市政だより
太宰府
NO. 487
平成4 1.1
題字「太宰府」は国宝翰苑からその字体を集録したものです



太宰府の文化財 80

青釉経筒 一合（重要文化財）

平安時代
財団法人田中丸コレクション所蔵

オリーブ・グリーンの美しいこの筒は、陶製の経筒です。

経筒については、以前何度か取り上げていますので、一般的な意味・用途についてはそれをご参照ください。（平成三年四月一日号など）

さてこの経筒は、四王寺山の経塚遺跡の一つから出土したと伝えられるものです。

中国の北宋時代、浙江省の越州窯において焼かれた青磁で、同種の経筒が約二十数例出土しています。その多くは四王寺山からの出土です。

経筒として埋納された年代は、墨書銘をもつ他の経筒などから推定して平安時代の末、十二世紀前半代と考えられています。

ところでこうした陶製経筒は、生産地中国での出土例は現在のところありません。そこで、経典を地下に埋めるという日本独自の風習に際して、わが国から特別に注文して製作してもらった可能性も十分考えられるといわれています。

本品は、越州窯における最末期の製品として、形も美しく優品の一つです。

■ 毎月2回 1・15日発行 ■ 編集 福岡県太宰府市総務部企画課 ☎921-2121 内線513